

第四十三回（令和五年度）

座間市中学生の主張作文コンクール入賞者作品集

中学生の主張

座間市青少年問題協議会

はじめに

座間市青少年問題協議会会長

座間市長 佐藤 弥斗

次の世代を担う青少年が、一人ひとりの役割と責任を十分に自覚し、心豊かで逞しくそれぞれの夢に向かって成長していくことが私たちの心からの願いです。

青少年が成長していく過程において、人との交流や奉仕活動をはじめとする多彩な体験活動ができるように、家庭・学校・地域が連携して社会環境を整備し、青少年の自立心の醸成と健全化などに取り組むことが最も重要なことでもあります。この一環として本年も、座間市青少年問題協議会では、第四十三回「中学生の主張」作文を募集いたしました。中学生が日常生活の中で様々な体験を通して将来の希望や大人への提言などを表現し、素直な気持ちで語られていることに深い感銘を受けました。多くの中学生から応募をいただき、その積極的な姿勢を高く評価いたします。この作品集が多方面で活用されることを期待しております。

最後に、本事業の実施にあたり、ご多忙のところ、ご協力をいただきました各中学校の先生方、並びに審査にあられた皆様

様に厚くお礼申し上げます。

第四十三回座間市中学生の主張作文コンクール入賞者

市長賞

「母の影響」

栗原中学校三年生

丸橋 蘭

議長賞

「私と家族く命のたすき」

栗原中学校二年生

若林 采音

教育長賞

「学級委員がくれたもの」

相模中学校二年生

高橋 遼馬

佳作

「私の学校生活」

座間中学校一年生

小野 翔春

「こんな大人になりたい」

座間中学校三年生

川端 樹里

「こんな大人になりたい」

座間中学校三年生

綾部 拓斗

「個性を自由にさらけ出せる社会」

栗原中学校一年生

和田 花凜

「私と家族」

「こんな大人になりたい」

栗原中学校一年生

相模中学校一年生

廣野 新汰

関野 陽斗

市長賞

「母の影響」

栗原中学校三年生 丸橋 蘭

私は人生の中で多くの人を笑顔にしたい。

そして百歳以上になるほど長生きをしたい。私は母の影響で、こう考えるようになった。

私の母は、私が五歳の時に病気で亡くなった。三十二歳だった。私は母が病氣と闘っていた事は知っていたが、常に笑顔で明るい母が亡くなると思った事は一度も無かった。本当に衝撃を受けた。当時は悲しみよりも衝撃の方が勝っていたと思う。それほど衝撃的な出来事だったので、中々母の死を受け入れられ無かった。その後は仕事で忙しかった父のかわりに祖父母に座間で面倒を見てもらえる事になった。祖父母の家には二人の従兄弟と叔母も住んでいたため、六人で暮らす事になった。今も六人で暮らしている。人数が多いため、生活は昔も今もとても賑やかだ。そんな場所で優しい人達に支えられながら過ごせているので私は本当に嬉しい。そして家族皆に本当に感謝している。ここで暮らしている内に成長を重ね、母の死を自然と受け入れられる様になっていったが、母の事を段々と忘れていった。

ある日、祖母が私に、母が生前に日記をつけていた日記帳を渡してくれた。母が日記をつけていた事を知らず、内容に興味があったので日記帳を開いた。そこには私が乳児の時にかかっていた脳の

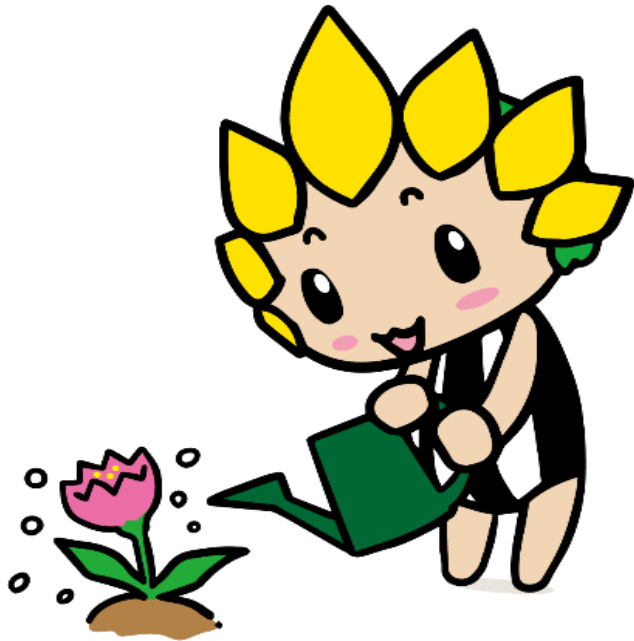
病氣に関する事がたくさん書かれていた。私の毎日の症状だけでなく医師の様々な発言、薬の名前や量や成分、書籍で得た情報やその筆者、そして病氣を治すために取った行動などが書かれていた。私はこの日記帳を見て泣いた。母がこんなにも私の病氣を治すために努力していた事、そんな母を忘れていつてしまっている自分の恩知らずさを感じ心を打たれてしまった。母のおかげで難病とされている病氣が完治して今、普通に生活できているのに、そんな恩人である母の事を忘れていいわけがないだろうと自分の事を責めた。病氣に関する事以外も母は日記に残していた。例えば私の面倒を見てくれた親戚の人や母の友人などの周囲の人の事、私の成長の様子、私が今までに喋った単語、そして私への「おりこうらんちゃん、大好きだよ」というメッセージなどだ。これら全てに愛を感じた。私は周囲の人や母に愛されて、支えられて生きてきた幸せ者なんだと思った。母が残した日記帳は多くの人や母の愛によって私が今ここに生きていると教えてくれた。

祖母は私に日記帳の存在だけでなく、母がつけてくれた私の名前の由来を明かしてくれた。蘭の花からの由来で、その花の様に「上品で人の心を明るくしてくれる人になってほしい」という理由で母は私に蘭と名付けたそう。私は自分には明るさが足りないと思っている、少しでも優しい表情でいる事を心がけて人の心を明るく、人を笑顔にできる人になりたいと思った。

私は母に恩返しをしたい。私の病氣を完治するために努力をたくさんし、最終的に完治させ今の私の不自由無い生活を作ってくれた母。私に素敵な名前をつけてくれた母。そして私に常に寄り添ってくれた母。そんな母にできる最高の恩返しは「長生き」だと思う。母は私が健康になる事を望んで努力をしてくれていた。だから

私が、これから健康で長い人生を送る事もきつと望んでいるだろう。この様な理由で私は母のために、若くして亡くなった母の分まで長生きをして百歳以上になりたいと考えている。

この作文で私が主張したい事をまとめる。一つ目は母が名前に込めた願いのように、私が今まで多くの人に助けられたり笑顔にされたりしてきたのだから、多くの人を助け、笑顔にしたいという事だ。二つ目は母が全力で作ってくれた自分の健康な頭や体を、母の努力を台無しにしない様に、母のために長生きしたいという事だ。そして最後は、これらの主張をする様なきっかけを作り、私の人生に良い影響を与えてくれた母が大好きという事だ。



議長賞

「私と家族く命のたすき」

栗原中学校二年生 若林 采音

「いてくれるだけで幸せ。ありがとう。」
私はかけがえない小さな命の存在にたくさん目に見えない繋がりを見せてもらっている。

母のお腹に新たな命の存在を知った日。それは、二年前に急逝した祖父の誕生日だった。私たち孫の四姉妹をこよなく可愛がってくれた大好きなじいじで、温泉や映画の記憶はいつも優しい笑顔と共にある。あまりの悲しさに日々しんみり手を合わせていたのだが、この日初めてうれしい報告ができて涙が溢れた。変わらないはずの遺影のじいじが、心無しかいつもより微笑んでいるように見えた。

超高齢出産に臨む母は、とても慎重に日々過ごしていた。私達姉妹は、出来る限りお手伝いをしたり、日に日に大きくなっていくお腹の赤ちゃんの成長に一喜一憂しながら、会える日を心待ちにしていた。

臨月になると、本当にお腹にすいかが入っているような丸みを抱えている。どんなものか私も試してみたが、すぐ息切れする母の気持ちがよく分かった。「こんな思いを五回もしてるの!？」私はそんなに頑張れるだろうか。疑問がわいた。

とうとう出産の時が来た。この日は奇跡的に家族がみんな家に

いて、一緒に助産院に向かう。一番上の姉は妹を膝に乗せて遠くから見守り、父とすぐ上の姉と私で、母を励ます。だんだん母の痛がり方が尋常ではなくなってきた。握る手が痛すぎる。でも今は我慢途中で赤ちゃんの心拍が下がった瞬間があった。助産師さん達がバタバタする中、「ママ大丈夫！あと少しだよ大丈夫！」よく分からないけれどそう言い続けた。とにかくみんな必死だった。そして『ふぎやーふぎやー』小さい！可愛い！生きてる！！何度も「やつと会えたね」と話しかけた。今まで味わった事のない喜びと安堵感で胸がいっぱいになった。

『じいじ、新しい家族が仲間入りしたよ。あの優しい笑顔で抱っこしてほしかったな。じいじの分まで私たちが守るからね。』

小さい弟がいる毎日は、可愛いくて愛おしくて、初めて笑った日、初めて手を握った日…。こんなに幸せがあるのかと思うほど、みんな喜び合った。その度に父と母は「あなたのこの頃はね…」と四人それぞれ小さい時のエピソードを聞かせてくれた。ああ、私もこうやって育ててもらったんだな。ハイハイの時のクスリと笑える話、熱を出した時のこと、食事のこだわり…。弟の成長そのものが自分の生いたちを振り返っている気がする。お風呂の入れ方が雑でちよつと引いたけれど、それも含めて我が家の歴史。こんなにぎやかに全力で愛情表現をする姉たちに囲まれた弟はどんな子に育つのだろうか。

もう一つ感じた事がある。それは初めて姉になる七歳の妹のことだ。今までしてもらった分、張り切って面倒をみようとするが、思うようにできず空回りする。七年前の私を見ているようだ。泣き続ける赤ちゃんの妹をどうしていいかわからず、自分まで泣き出してしまったあの日のこと。同時に姉達の気持ちも今になって分

かる。「あーちゃんはまだいいよ」と抱っこを取り上げられて悔しかったことが蘇る。こんな思いだったのか。

まん中は何かと大変だと複雑だったけどいろいろいるな立場の気持ちもわかるのも悪くないのかもしれない。妹には「大丈夫。すぐに素敵なお姉さんになれるよ。」と伝えようと思う。

どんどん活発になる弟と大変になる母。テスト前や習い事で忙しい時に「お願いね」と言われると、正直イラッとする。でも、弟が満面の笑みで手を伸ばしてくると、一瞬でそんなことを忘れて抱きしめてしまう。困らされる位をされてもへっちゃらだ。だって、私もさんざんしてきて今があるのだから。

祖父が亡くなる直前にプラレールを買ってくれた。その時は女の子だけなのになぜと思ったけれど、今、弟が興味を持って遊び始めている。会ったことがないのに、弟とじいじが繋がっているように不思議な幸せな気持ちになる。

姉として、妹として、一人の人間として、私に託されたたすきは確実につなごう。めいっぴいの愛をこめて。



教育長賞

「学級委員がくれたもの」

相模中学校二年生 高橋 遼馬

今年の四月、僕は前期学級委員に任命された。学級委員の選出アンケートで、男子の中で最も票が集まったのが僕だったらしい。

担任の先生からこの話を聞いたとき、僕はかなり衝撃を受けた。まさか自分が選ばれるなんて思ってもみなかった上に、今まで学級委員を任されたことなど一度も無かったのだ。それに、本当は放送委員をやりたいかつたし、何より、僕は誰かのために自ら行動するということがとても苦手だ。本音を言えば断りたいかつたのだが、何となくそれもできず、渋々学級委員を引き受けることになった。

学級委員を任されてまず驚いたことは、仕事量の多さだ。一日でやることと言えば、朝学活や帰り学活の司会、授業の号令、着席や授業準備の呼びかけ、そこに定期的に行われる学年会議や学校全体の評議会などが加わってくる。クラスや学年の代表ということもあり、会議の内容は極めて重要なものが大半だ。そのため、常に話を真剣に聴いていなければならない。また、会議は休み時間や放課後に行うことが多いため、自由時間は必然的に少なくなる。これは、遊ぶことが生きがいである僕にとって、非常に辛かつた。

一方、学級委員を任されて良かったこともあった。学級委員になつてから、以前とは比べものにならない程、人前に立つて話す機会が増えた。そのおかげか、授業中の挙手発言が去年より積極的に行

えるようになった。また、会議等で自分の意見を述べることもよくあり、自然と説明力も身についた気がする。

だが、こうして成長を実感できていることも、今まで学級委員を続けて来られたことも、自分一人の力では成し遂げられなかった。

僕は何度か、学級委員を辞めたいと思うことがあった。いつまでも経っても仕事を上手くこなせない自分に腹が立ち、ちゃんとクラスをまとめられているのか不安を覚えたからだ。そんなとき、僕の異変に一早く気付き、声をかけて下さったのが、英語科の高山先生だ。先生は僕の悩みを聞き、こうおっしゃった。「遼馬は、全部自分だけで背負おうとしているから苦しいんだよ。もっと相方とか先生を頼った方がいいんじゃないかな。」

確かに、今までの僕は仕事も悩みも全部一人で抱え込むことが多かつた。もう少し周りの人を頼ってみても良かったのかもしれない。そして、最後にはこう励まして下さった。

「遼馬はよく頑張ってる。もっと自分に自信を持ちなよ。」

この言葉が、再び僕を奮い立たせてくれた。先生の励ましが無ければ、きっとどこかで挫折していたことだろう。

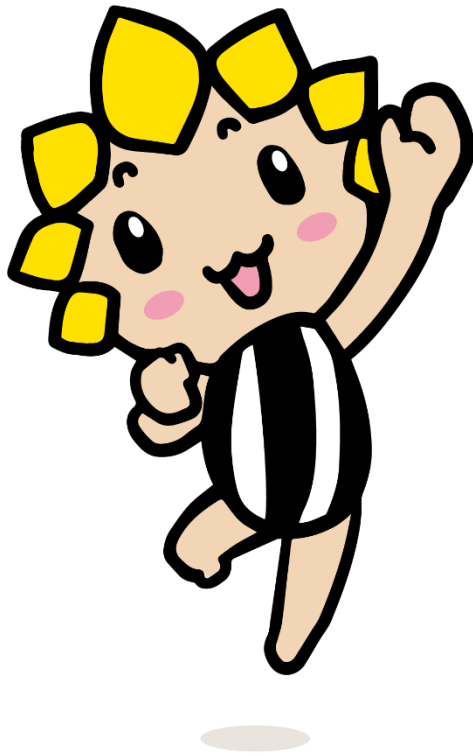
僕は学級委員を任された三ヶ月間で、数々の経験を積んだ。この経験が、自分のスキルアップに繋がり、何より、自分がどれだけの人々に支えられて生きて来たのか、改めて知ることができた。

大切なのは、経験から得たものをどう生かすかだと思う。僕の場合、学級委員としての経験を後期学級委員へのサポートに役立てたり、クラス活動などを率先して行い、皆の手本になったりして、生かすことができる。経験は、生かしてこそ意味があるものなのだ。

僕が皆さんに伝えたいことは、やりたいこと、やろうかどうか迷っていることは、それが自分や他人を傷つけるものでない限り、挑

戦すべきだということである。人生には限りがあり、終わりがいつ訪れるかは誰にも分からない。また、人生は経験がものを言う。若いうちに多くの経験をした人間は、後の人生において有利になると僕は思う。その経験は必ず、自分の人生の糧となるからだ。

僕は、あと数ヶ月で学級委員の任期を終える。学級委員の経験は、僕の人生をより豊かなものにしてくれた。残り約一年半の中学校生活、何事も失敗を恐れずに挑戦を続け、更なる成長を遂げていきたい。



佳作

「私の学校生活」

座間中学校一年生 小野 翔春

中学校の授業は、将来の夢へのつながりをもっと明確に見えるようにしてほしい、そう願っています。

毎日、時間割り通りに行われる授業をただ受けるだけよりも、将来につながるのか、将来の夢や希望にどのように関係するのかわかっていた方が、有意義な学習時間になると、僕は考えるのです。そうすることで、勉強に苦手意識を持っている人でも、各教科の先にある様々な分野の中に好きなものや興味を持てるものを見つけれ、授業への向き合いづらさがあつたとしても、軽減されるのではないのでしょうか。

僕が、このように考え始めたきっかけは、ある大学のオープンキャンパスに行き、模擬授業を受けたことにあります。日本語学科、ジャーナリズム学科、歴史学科という二つの学科の模擬授業を受けて、正直、僕に見えている世界が大きく変わりました。

僕は、国語が好きです。漢字を覚えたり、本を読んだり、自分の考えを発表したりすることが好きで、国語が好きになりましたが、国語の授業自体は、皆が学ぶ常識的な知識が全てのように見えていました。ところが、模擬授業を受けてみると、中学校の国語からさらに枝分かれしているたくさんの専門分野があること、そしてそこには、今も未解明のことがあり、それを研究するという学問があ

ることが分かったのです。今、国語の授業で漢字や文法、現代文などを学んでいることの先には、こんなに面白いことが待っていたのか、さらに、その先はこんな職業につながり、こんな人生を選ぶことができるのかと、考えもしなかった未来の広がりにも心底驚きました。そして、今聞いた話を中学でも聞ければな、それが難しくてもそこにつながっているということだけでも教えてもらえていたらな、とそう思ったのです。

僕の主張には、様々な反論もあると思います。おそらく、「中学校は、勉強の基礎を学ぶ場だからそんなことまでやらなくていい」という意見もあるでしょう。僕は、その様な意見にも反論がありません。各教科の先にある職業や研究の話聞くことができたらいい、その教科に関する将来の夢を描くことができます。それは、目標設定につながり、関連する教科にも興味が沸いたりするでしょう。少なくとも、基礎的な勉強を今までとは違った視点で見れるようになるに違いありません。苦手意識や嫌悪感も、減るかもしれません。目標ができることで、くり返し練習や記憶することなどの基礎的な学習にも、意味を見出しやすくモチベーションを持てるのではないのでしょうか。

現在の、中学校生活でも、将来について学ぶ機会はいくつかあるようです。中学校を卒業した姉達に聞いてみると、職業体験や職業講話などの機会があったそうです。職業体験では、興味のある職業について調べ、その職業の現場体験をし、職業講話では、その職業に就いている方たちの体験談が聞けるとのことです。それらの機会では、職業について知ることができても、職業と教科のつながりに関しては、知りにくいのではないのでしょうか。

そのような現状で、僕は、これからの学校生活を夢への材料にする

るために、どのように過ごすかを考えました。

授業中に、夢へつながりそうな話を聞けたときには、忘れないようにメモをしようと思います。また、職業体験などの機会があればしっかりと調べ、話を聞きたいです。そして何より、自分でも将来についての展望を持てるよう、視野を広く持ち、様々な人と関わって見聞を広げ、興味のあることは深く調べ、新しいことにも挑戦しながら、今の学習を大切にしていきたいです。



佳作

「こんな大人になりたい」

座間中学校三年生 川端 樹里

私は将来お姉ちゃんみたいな人になりたいと思っています。理由は、とても優しく、家族思いで、困っていることを話せて逆に私が困っているときに話を聞いてくれる人で、自分もお姉ちゃんみたいになりたいと思います。

きっかけは、家の事情でお姉ちゃんと私が児童相談所で生活をしないといけなくなり、それから約七ヶ月間児童相談所にいました。その時のお姉ちゃんは中学二年生で、私は小学二年生でした。人見知りすぎて何もしゃべらなかつた私を、お姉ちゃんは優しく「大丈夫。」と言ってくれました。でも、大好きなお母さんと離ればなれになつて、さみしくて毎日泣いていました。そのときの私はまだ何も知りませんでした。ただでさえ私よりも児童相談所で生活している理由を知っていて困っているお姉ちゃんをもっと苦しませていました。それに気づいたのは、この生活に慣れてきた時です。心理士さんと話しているお姉ちゃんを待っていて部屋のドアを開けたら、お姉ちゃんは話し終わって戻ってきました。でもそのときのお姉ちゃんは泣いていてとても元気がありませんでした。私はすぐにお姉ちゃんの泣いている理由が分かりました。今まであった色々なこと話して泣いていました。でも今度は私が心理士さんと話すときは、「樹里も何かあるんだつたらちゃんと話してき

なよ。」と言われました。その時私は、お姉ちゃんが家よりここで生活がどんなに嬉しかったのか知った瞬間でした。私はここに来て良かったのかなと思いました。

でもある日外で遊んでいて、さっきまでバドミントンを一緒にしていたお姉ちゃんが、職員が消えたすきになくなりました。そのとき育てていた花を見に行つたと思つた私は呼びに行きました。そしたら、いなくてびっくりして探しました。でもどこにもいなくて「脱走したんだ。」と思いました。私はすぐすぐ泣きました。お姉ちゃんが帰ってくるまでずっと。探してもいなくて脱走したと知つた後にすぐ隣にいる職員に怒りました。「おまえらのせいだ。」って言いました。それで部屋に行つて泣いていました。お母さんもないお姉ちゃんもない。自分のそばに家族が誰一人いない状況に不安でさみしくてずっと泣いていました。ずっと私につきそってくれていた職員に「お姉ちゃん帰ってきたよ。」と言われてすごく安心しました。お姉ちゃんは私に謝ってくれました。すごくうれしかったです。でも家にいたときとだけ苦しい思いをしていたのか、これからも相談をしてスッキリしたいと思つているお姉ちゃんの気持ちも知りました。だからもう泣くのは止めようと思つた。でも何かあつたら笑わせようとしてお姉ちゃんを見て、自分もお姉ちゃんみたいな素直で優しくおもしろい人になりたいと思いました。

それから七ヶ月経ち、私達にもつと良いことがありました。それは、児童養護施設にいけるといふ話です。私とお姉ちゃんは悩んだ結果行くことに決めました。お姉ちゃんもすぐよるこんでいました。児童養護施設には色々な人がいました。でも年齢関係なく関わられるし、行事もたくさんあつて毎日が楽しいです。私のお姉ちゃ

んは高校に合格し、そして、自分の夢のために大学に行くことを決めました。そして私とお姉ちゃんが一緒にいれるのはあと半年で終わり、そのときの私は小学六年生でお姉ちゃんは高校三年生でした。

そのとき初めてお姉ちゃんの将来の夢について知りました。お姉ちゃんの将来の夢は、児童養護施設のケースワーカーになって自分と同じように苦しんでいる子、困っている子の相談相手になるって言うていました。私はそんなお姉ちゃんを見て「かっこいい」と思いました。もつと「かっこいい」と思ったのがいろんな施設にいる子を書く、あすなろという本を見たときです。普段は聞かないお姉ちゃんの本音がたくさん書いてありました。自分と同じように児童相談所や施設にいる子の苦しんでいることや困っている子を助けたいと思っっている気持ちや、自分が実際に経験してきたことと同じように施設にいる子たちの話を聞いて、安心した生活を送ってもらいたいと思っっている気持ちを知って、良いケースワーカーになれるそうだなと思いました。

だから将来自分も、他の誰よりも、お姉ちゃんみたいになって、自分がお姉ちゃんに対して思っっていることと同じように友達や施設の子に、樹里みたいになりたいって思ってもらいたいと思っました。だから自分も将来の夢を決めて、お姉ちゃんみたいになって色んな人の役に立てる自分になりたいと思っました。



佳作

「こんな大人になりたい」

座間中学校三年生 綾部 拓斗

僕の周りには、明るく優しく言葉をかけてくれる人がいます。大変な時も、言葉や優しさをもらって元気になれたことが何度もあります。

僕が毎朝登下校する道では、挨拶をしてくれる人がいます。最初に挨拶するのは、近所の知り合いのおばあちゃんです。僕が小学生の頃から毎朝、僕に会ったら

「おはよう。いってらっしゃい。」

と笑顔で言ってくれます。小学生の頃は、元気よく挨拶を返していましたが、中学生になると、少し恥ずかしくて会釈だけで挨拶をすることも増えました。それでも、おばあちゃんは、いつもと変わらない笑顔で挨拶してくれます。

休日に、おばあちゃんに会った時、僕はこんなことを言われました。

「君に挨拶をする時に、今日もがんばってねと気持ちを込めて声をかけたり、挨拶を返してもらったりすると、体の中からパワーが出てきて元気でいられるのよ。だから、君にありがとうと言いたかったの。」

僕は、この言葉に驚きました。いつももらってばかりだと思っっていた挨拶や笑顔。僕自身がおばあちゃんに元気をあげていたなんて。

僕がもつと気持ちを込めたり、笑顔で伝えたりできると、人を元気にできるのかもしれない。

次の日から、

「おはようございます。」

の中に、気持ちや日頃の思いを込めて伝えるようにしました。そうすると単なる言葉のやり取りではなく、おばあちゃんが言ったように、自分までパワーが湧いてくるような感じがしました。

最近では、登校中、幼稚園のそばで顔を合わせる地域の人も、毎日挨拶ができるようになりました。部活と学校の学習の両立で苦しい朝もありますが、地域の人の

「おはよう。がんばれよ。」

という言葉で、気持ちを持ち直すことができます。言葉や挨拶には、人を前向きにさせたり、元気を与えたりする力があるのだと感じるようになりました。だからこそ、これからも続けていきたいです。

地域の人の優しさに触れることが、もう一つありました。自分の部屋の棚の整理整頓をしている時に、保育園を卒園した時にもらった写真立てが出てきました。一緒に添えられていた手紙には、

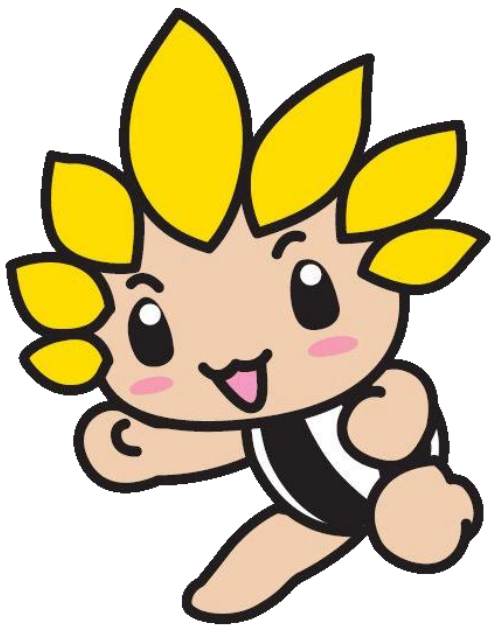
「そつえんおめでとう。てづくりのしやしんたてです。たくさんのおもいでをいれて、かざってね。わかばやしのおじいさんより。」と書かれています。そのおじいさんが誰なのか母親に聞くと、

「若林さんは、保育園の正門前の家の方で、何年も子どもたちの成長を見守ってくれていて、毎年手作りの写真立てを作ってプレゼントしてくれているんだよ。」

と教えてくれました。僕は顔も名前も知らなかったけれど、地域の子どもたちのことを、愛情を持って見守ってくれていた人がいた事実を十年という月日を経て触れ、胸が熱くなるのを感じました。

そして今度は、自分が、自分の力や技術を使って、地域の人や周りの人に何か返していきたいと思えました。

だから僕は、いつも言葉や挨拶、思いやりのある行動で周りを元気にしてくれる地域の人のように、これからは、自分自身が地域や社会のために何ができるのか考えて行動できる大人になりたいです。そのために「言葉」や「挨拶」「思いやりのある行動」を大切にしていきたいと思えます。



「個性を自由にさらけ出せる社会」

栗原中学校一年生 和田 花凜

みなさんは、自分や周りの人の個性を大切にしていると胸を張って言えるだろうか。

私たちは常に人の目を気にして、周りに合わせながら過ごしている。なぜなら、周りに合わせなければ、人が離れていってしまうからだ。人間は自分一人では生きていけない。

そんな中、私たちは「個性」という言葉を使う。インターネットで、個性とは何かを調べてみると「自分らしさ」のことであり、自分がありのまま自然と表現されているものと書かれていた。

私は今まで、「自分らしさ」を抑圧し、周りと合わせることを当たり前のように行ってきた。そのような経験があるのは、きつと私だけではないだろう。しかし、あることをきっかけに、私は「自分らしさ」について考えさせられることになった。

そのあることとは、クラスメイトの言葉である。私が小学生のときの話だ。朝会で話す機会があり、張り詰めた空気に思わず「緊張する」と呟くと、近くにいたクラスメイトに驚かれた。そして、「〇〇も緊張するんだ。ロボットみたいなイメージだった。」と言われた。小学生の頃の私は、周りに合わせることに努め、先生が求める理想に近づくことに必死だった。そして、知らず知らずのうちに完璧主義になっていて、自分を追いこんでいた。しかし、クラスメイ

トの言葉を聞いて「それではただのロボットではないか」と気がついた。

人間とロボットの違いは個性があることだ。私はいまだに「個性を見失っている」と感じることがある。

例えば、勉強だ。多くの人が模範的な解答ができるように塾に通い、学校が求める理想に近づこうとする。「なぜ勉強をするのか」と聞くとほとんどの人が「いい学校に入り、いい会社に就職

するため」と答える。また、「勉強はやらなきゃいけないから」と答える人もいる。もちろんいい学校やいい会社に入ることも、お金も大切だ。しかし、それは本当に自分がしたいことなのだろうか。どこかで自分の個性を見失っていないだろうか。

では、なぜ個性を見失ってしまうのか。私は、個性をさらけ出すことへの抵抗があるからだと考える。その抵抗が生まれてしまう原因は三つある。

第一に、子どもの頃から「〇〇であるべき」を押しつけられてしまうからだ。私の友達は「姉なんだから我慢しなさい」と言われ、悩んでいた。また、言われたことをするのに精一杯で、本来自分がしたかったことを見失ってしまうこともある。

第二に、個性をさらけ出すことにトラウマがあるからだ。私は自分の好きなことをしていると「真面目なのになんで？」とよく言われ、複雑な気持ちになる。「〇〇なのに」と言われると、自分という人間が否定されたようで、個性をさらけ出すことに抵抗が生まれてしまう。

第三に、周りと違うことが間違いだという固定概念があるからだ。「周りと違う＝間違い」という考え方がいつのまにか染みつい

てしまっているため、自分の個性は間違いなのではないかと考えてしまう。

この三つの原因はどれも教育にある。子どもの頃に個性を抑圧しておきながら、社会に出ると個性が求められるのは、あまりに理不尽すぎないか。

私たちは無意識に個性に良し悪しを決めつけている。良いとされる「利益になる個性」は社会で求められる。例えば「思いやりがある」「正義感が強い」などだ。一方で、悪いとされる「利益にならない個性」は求められないどころか、受け入れてもらえないこともあるのが現状だ。このような固定概念が、いじめや差別の原因となってしまうのだ。

このように、どんな個性も受け入れることが私たちの課題である。たとえ「利益にならない個性」でもその人を作り出している大切なパーツであることを認めれば、多くの人の「生きづらさ」が解消されるだろう。

そんな個性を自由にさらけ出せる社会になることを願って、最後にもう一度問う。みなさんは、自分や周りの人の個性を大切にしているかと胸を張って言えるだろうか。



佳作

「私と家族」

栗原中学校一年生 廣野 新汰

僕の家族は、父母、兄、姉の五人家族です。父は福島県出身、母は山形県出身なので祖父母とは一緒に暮らしていません。一緒に生活していなくても、僕にとっては大切な家族です。

新型コロナウイルス感染症が蔓延していたここ三年程、僕達家族は祖父母の元へ帰省していませんでした。しかし、コロナによる行動制限がなくなり、福島の祖父の八十八歳の米寿のお祝いをする事になりました。父や伯父達が相談し、祖父には秘密にして父の実家にみんなが集まることにしました。

祖父は八十八歳になりましたが、まだまだ元気に過ごしています。耳が遠くなり多少不自由ですが、八十八歳とは思えない体力の持ち主です。若い頃は山から材木を大型トラックに積み込み東京や千葉まで運んでいたそうです。猟銃の免許も持っていて山に入って、クマやイノシシなどの駆除を行っていたり、今でもワナをかけて、イノシシやシカの駆除のため見回りをしているそうです。神奈川で生活している僕には現実的ではありませんが、田舎の山では人よりイノシシやシカ、クマが増え人々の生活を脅かす事態になっているそうです。そんな状況を守るために、今でも活動している祖父はすごいと感じました。それでも年々老いを感じている様で、僕が小さい頃よりは色々な面で体が動かない様です。僕は

小さい頃から人見知りな所もあり、年に数回しか会えない祖父の所に行ってもなかなか話をすることも出来ませんでした。

まず一番の問題は方言が分からないという事です。祖父は僕の最近の事や父が小さかった頃の話を沢山してくれませんが、外国の人と話している様に、言葉が分かりません。父や母が通訳の様に説明してくれてやっと理解する事ができます。でもいつも、僕や家族の事を心配してくれている事はよく分かります。みんなが帰省する時とても喜んでくれるからです。その祖父をお祝いするために、八月十三日、伯父達家族と共に祖父の家に四年ぶりに家族が集まりました。祖父はみんな揃うとしても嬉しそうでした。来られない人もいましたが、孫がプレゼントとして用意した物はなんとみんながみんな湯のみ。

「毎日日替りで使える。」

と笑っていました。沢山の孫や息子達がいっても祖父は名前を間違える事なく話します。まだ三歳のひ孫の事もすっかり分かります。本当に家族の事を大切に思っているんだと感じます。みんなに囲まれている時は、パツと表情が明るくなりとても嬉しそうでした。そんな祖父にいつまでも元気に長生きしてほしいと思います。普段は遠くてなかなか会えない祖父。僕が生まれる前、祖父は以前住んでいた静岡県に来てくれました。自分の子供達が生まれる時も仕事ですぐには抱っこできなかったと言っていました。僕が生まれた時

「こんな生まれすぐの子抱っこしたの初めてだ。」

と言っていたそうです。祖父にとっては最後の孫が僕です。祖父がいつまでも元気でいてくれて、僕が大人になって今まで注いでく

れた愛情の恩返しができるようになれば良いなあと思います。米寿の次の卒寿も白寿も、また家族みんなでお祝いしたいと思います。

普段は離れて暮らしている祖父や伯父家族ですが、何かあったら一致団結してくれる僕にとっては強い味方です。助けてもらえばかりではなく、僕も力になれる人になれたらと思います。家族はお互いに見返りを求めずにお互いのために尽くす事が出来る関係性なんだろうなと感じます。自分がよければそれで良い。そう思いがちですが、自分のちよつとした行動や発言が誰かのためになることもあると思います。いつまでも楽しく元気にいてほしいです。僕の大切な家族が、いつまでも楽しく元気にいてほしいです。



※入賞者作品集の編集にあたり、作品集への作文掲載を辞退された方については掲載しておりません。

審査を終えて

審査員 橋本 武

「座間市中学生の主張作文コンクール」は、四十三回目を迎えました。今年の応募作品については、次の九つの課題に対して、応募総数一四八七点の作品が寄せられました。

- 一 私たちと環境保護
 - 二 命を考える
 - 三 私が社会や他人のためにできること
 - 四 私の学校生活
 - 五 私と家族
 - 六 こんな大人になりたい
 - 七 私の人生への夢
 - 八 ネット社会に生きる
 - 九 身近な国際化を考える
- 応募作品を振り返ってみますと、身近な出来事や家族のことから、世界へ目を向けたものなど、今を反映しているものから普遍的な内容まで様々な作品が集まっていました。
- これらの作品は各中学校で一次審査を行い、九五点の作品数に絞られ、九人の審査員で厳正に審査をいたしました。
- その中から本作品集には、市長賞、議長賞、教育長賞、佳作に選ばれた九作品のうち八作品を掲載しました。
- 受賞された皆さん、おめでとうございます。ご家族をはじめ、先生方や生徒の皆さんには、ぜひ、ご一読いただき、作品の素晴らしさを実感していただきたいと思います。

以下、審査の感想や所見のまとめを紹介することで、選評とします。

『私たちと環境保護』には、日本人の一人が一日に捨てている食品の量を「お茶碗一杯分」と称し、分かりやすく「食品ロス」の問題を扱った作品がありました。一人一人の努力が世界の多くの人々を救うという、明確な主張が綴られた作品でした。環境問題に対する独自の視点がすばらしく、主張が感じられ頼もしく思いました。他にも「地球温暖化」「海洋問題」「ごみ問題」等々、多くの作品から私たちの地球環境を守っていききたいという熱い思いが伝わってきました。

『命を考える』には、尊い命が失われることへ、戦争や水難事故など、事の大小に関わらず、命を大切にすることに真剣に向きあった作品が多くありました。また、動物に関する内容も多くありました。ペットというよりも家族に値する犬や猫に、ひどい扱いをする業者に憤りを感じた作品。農業高校で乳牛の世話をする姉と話し、牛の育ちから、私たちの命に目を向ける作品では、中学生の純真な気持ちが伝わってきました。

『私が社会や他人のためにできること』には、どんな個性でも受け入れていこうという作品がありました。一年生ながら、自分の内面をしっかりと観察して、力強い文章で表現していました。他には、「ありがとう」という言葉にしっかりと向き合い、その言葉の意味を深掘り、大切にしようという思いが書かれていました。感謝の気持ちの大切さに目を向けた作品でした。

『私の学校生活』では、学級委員の選出アンケートで最も票が集まり学級委員に任命され、その活動を通して成長していく様子が書かれた作品がありました。しぶしぶ受けた学級委員。莫大な仕事量と、課された責任の重さに何度か辞めたいと感じたときに、教師からの励ましの一言で踏み止まることになりました。今では「経験は生かしてこそ意味がある」と思えるようになった筆者の強い気持ちが綴られた作品でした。教育長賞を受賞しています。

『私と家族』には、新型コロナウイルスの感染予防でしばらく会えなかった祖父と

久しぶりに会うことができた温かな家族の団らんが書かれた作品や、喧嘩ばかりしていた母と真剣に話をする中で気持ちを通じ合う親子。離れてみて、初めて分かった姉の優しさが書かれた作品など、どの作品も家族の大切さや愛情が実感できる作品でした。

議長賞を受賞した作品は、二年前に亡くなった大好きな祖父と、生まれてくる弟への生命のバトンパスから始まる作品がありました。生命誕生の大切さだけでなく、弟を中心に新たな生活が始まる様子に、家族に対する感謝や愛情が感じられる温かい作品でした。

『こんな大人になりたい』には、「軸」がある大人になりたいという作品がありました。そのためには、周りの評判などを気にせず、自分の思いをしつかり自分の「言葉」で伝えることで、それが結果として自分の幸せにつながるという、とても力強い文章で説得力がありました。

『私の人生への夢』では、獣医師を目指したいという作品がありました。動物好きだったことと、医療ドラマを見て医師への憧れがきっかけです。夢で終わらせるのではなく、実現できるような真剣に考える強い姿が見えました。他には、「電車の運転手」「旅行の添乗員」「外交官」と夢はどんどん変わっていても、大切なことはどんな時でも、夢に向かって努力を忘れないことと、明るく前向きな気持ちが変わる作品もありました。

『ネット社会に生きる』には、ネット社会の良し悪しを述べ、SNSのコメントに関する作品が多くありました。SNSは便利なコミュニケーションツールであると同時に「誹謗中傷」「スマホ依存症」などの課題が山積。しかし、今回寄せられた作品からは、SNSの使い方を考えなければいけないと主張する姿勢に共感しました。

『身近な国際化を考える』では、今回は二次審査に残った作品がありませんでした。しかし、グローバル化が進む今日、私たちの日常にも関わる大事なテーマであることには変わりありません。

市長賞には、栗原中学校3年生の丸橋蘭さんの「母の影響」が選ばれました。

小さなとき（5歳）に母を亡くし、祖父母に育てられた、そんな筆者が母の素晴らしさを余すところなく語っている感動的な作文です。残された小さな私を思う母の優しさ、そのことに応えようとする筆者の思いが描かれています。将来は、母が名付けてくれた「蘭」の花のように周りの人を明るくし、母の分まで健康で長生きをしようという思いを抱きながら、前向きに歩んでいる筆者の生き方に心打たれました。素敵な文章をありがとうございます。

この他の入賞された皆さんの作品も題材やテーマがよく考えられており、そのことに真摯に向き合う姿勢が感じられ、私たちの心に響きました。ありがとうございます。

読んでいて気がついたところ、工夫がほしいところをまとめてみますので、今後の参考にしてください。

- 一 課題に沿って自分の考えをしつかりまとめることが大切です。特に最後の表現を工夫しましょう。
- 二 自らの体験を通して考えたことや分かったこと、今後への目標などを簡潔に表現すると訴える力が強くなります。
- 三 提出する前に推敲することが大切ですが、他人に文章を読んでもらうことも効果的です。

以上、多くの主張作文を読み、普段から感じていることや改めて考えたことを素直に自分の言葉で表現することのできるこの主張作文コンクールは、座間市の中学生にとって大きく成長する機会であり大変貴重な場になったと思います。次年度もすばらしい主張作文が、多数応募されることを期待しております。

なお、応募にあたり、熱心にご指導くださいました、各中学校の諸先生方に、深く感謝申し上げます。

審査員（敬称略・順不同）

平野裕奈（座間中学校 教諭）

岩井由人（栗原中学校 教諭）

田中悦子（南中学校 総括教諭）

橋本武（教育指導課 主事）

林原真由美（教育研究所 教育相談員）

平田理絵（青少年センター 青少年育成指導員）

吉田奈々子（青少年指導員協議会 青少年指導員）

平野敦子（青少年指導員協議会 青少年指導員）

東谷美樹（青少年指導員協議会 青少年指導員）

第四十三回（令和五年度）座間市中学生の主張作文コンクール入賞者作品集

中学生の主張

（令和五年十一月発行）

編集発行

座間市青少年問題協議会

〒252-0023 座間市立野台一丁目一番四号

座間市こども未来部こども育成課（青少年センター内）

電話 〇四六（二五三）八四一五



シンボルマーク

(制定 平成3年4月)

座間市の頭文字「Z」をモチーフにしつつ、中央のラインは市内を流れる川を楕円は太陽と市の豊かな自然をそれぞれイメージしました。

21世紀に向かって“みなぎる活力とやすらぎが調和するときめきのまち”の実現をめざすシンボルとして制定されました。